

ひょうご事業改善レビュー外部委員会 議事概要

【第4回（8月30日） 1/2】

項目 / 外部委員に伺う視点	主な意見
<p>新技術の活用等による有害鳥獣捕獲狩猟者の育成強化 (有害鳥獣捕獲狩猟者育成プロジェクト) ＜環境部＞</p> <p>外部委員に伺う視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ICT等新技術習得への支援策、有害鳥獣捕獲班の組織力強化のための方策 	<ul style="list-style-type: none"> 狩猟免許を取る目的として、趣味のために取る人と、農業被害防止等のための人とに分かれる。後者の人でも、捕獲後の処理がネックとなり、捕獲を躊躇する人も一定いると聞くので、捕獲後の処理に対するサポートを行う必要があるのではないか。 狩猟免許取得者に捕獲チームに参加してもらうのには、どこがボトルネックになっているのかを明確にする必要がある。チームに入った人に入った理由をアンケート調査するなどしてはどうか。 他自治体で実証実験をした経験から、動物の生息数等の調査にICTを使うのは難しいというのが実感である。 有害鳥獣の捕獲者を増やすためには、狩猟免許を取って狩猟をする人を増やすための広報・啓発活動と、狩猟者の育成の二つに分けて取り組む必要がある。それぞれについて指標を設定し、効果を図っていく必要がある。 現在のアウトカム指標は施策の目標となっていると思われるので、施策目標と、この事業のアウトカム指標と切り分けて考えなければならない。有害鳥獣捕獲狩猟者の育成事業であるので、アウトカム指標は育成に関するものとすべき。アウトカム指標は捕獲入門講座の受講者数、有害鳥獣捕獲班員育成者数とし、アウトプット指標を研修の実施回数とすべき。
<p>◆目標設定・指標を伺う事業 再生可能エネルギーの地産地消モデルの構築 ＜環境部＞</p> <p>現行の設定指標</p> <p>アウトカム：再生可能エネルギーによる発電量 アウトプット：地域循環共生圏事業体数</p>	<ul style="list-style-type: none"> 県が直接実施するのではない以上、儲からないと誰もやらない。GDP的な考え方でいいと思うが、バイオマス導入等によりどのくらい効果をもたらされたかを指標にできないか。 この事業は実証モデルの構築が目的であるので、発電量がアウトカム指標ではないのではないか。儲からないと持続可能性もない。収支が見合った、持続可能になったという指標をアウトカム指標に設定できないか。その上で、その地域を増やしていくことを目標にすべき。 バイオマス等を使うことで、本来使うはずだったエネルギーを使わなくてよくなったという意味で、環境価値が生じている。再生エネルギーに協力している事業体として認証し、そこに都市部の企業が寄付をすることで環境価値に貢献しているというような仕組みができれば、循環というものが進むのではないか。
<p>新規団体の参入促進などを通じた県民芸術劇場の活性化(県民芸術劇場の開催) ＜県民生活部＞</p> <p>外部委員に伺う視点</p> <ul style="list-style-type: none"> 選考基準や客観的な評価方法 	<ul style="list-style-type: none"> 各種の芸術について、画一的な評価方法を作るのは無理があるのではないか。また妥当性にも疑問がある。 基準を作らなくても毎年一定の数の団体を入れ替える仕組みを導入してはどうか。 現状の仕組みは、出演する団体が固定的になっているという点で、芸術団体の育成という事業目的に照らし、いかがなものか。一定の競争性を生み、活性化を促進するための仕組みが必要。学校公演については、事前に自分たちの団体の紹介動画を作成してもらい、それを元に児童・生徒に見てみたい団体を選んでもらえばよいのではないか。 この県民芸術劇場に選ばれているということがステータスになるという状態を作ることが必要ではないか。 登録されていることがステータスとなっている状態ができたうえで団体の動画が拡散されていけば、それを見た子どもたちが、もっと見たい、自分も参加したいと思うようになり、将来のプレーヤー育成の循環が生まれるのではないか。 一般公演のアウトカム指標は入場者数とし、学校公演は生徒がもう一回見たいかというアンケートをとって指標にしてはどうか。
<p>教育副読本のデジタル化および家庭・地域での活用促進(教育副読本配布事業) ＜教育委員会＞</p> <p>外部委員に伺う視点</p> <ul style="list-style-type: none"> 副読本デジタル化にあたり、利便性向上やコスト削減、業務改善につながる取組 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭、地域でより活用してもらうとのことだが、専用端末がないと見られないなどのデメリットも生じてしまう可能性もある。冊子での配布を全部やめるなら一定の配慮が必要ではないか。 一気にやってしまうと後戻りできないので、まずは中学生等からやってみて、課題が生じないか見てみるなど、PDCAを意識すべき。 利便性の向上が目的の一つになっているので、学校の先生が授業で使いやすいと考えているかを指標の一つにしてはどうか。 有効活用に向け、利用がどのようにされているかを把握すべき。学校での利用状況、各家庭内での利用状況のアンケート実施を検討してほしい。 デジタル化を行った場合、コメントを寄せてくれた本人の声を収録すれば、子どもへの訴求力が大きいのではないか。

項目 / 外部委員に伺う視点	主な意見
<p>地域楽農生活センター開設支援事業と田舎暮らし農園施設整備支援事業の発展的統合による楽農交流人口増加に向けた支援の充実 （地域楽農生活センター開設支援事業） （田舎暮らし農園施設整備支援事業） <農林水産部></p> <p>外部委員に伺う視点 ・楽農交流人口増加に向けた、裾野拡大のための支援策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・移住はハードルが高いが、趣味として農業をやりたいという層は多いのではないかと。週末農業をやる人を取り込む等交流人口を増やす取組に注力してみてもどうか。また、週末以外に農地の管理をする地元農家の負担軽減のためのICT活用も検討してみてもどうか。 ・移住に対する行政の支援がこれだけあるということに加え、野菜販売でどれだけ収益があるということが示されていれば移住が検討しやすくなる。現在、補助対象者等を対象に収益の状況を調査し、その内容を広報してみてもどうか。 ・楽農交流人口増加に向けては、誰に関心を持ってもらうか、どうやって始めてもらうか、どうやって続けてもらうかが課題となる。始めてもらうには市町等のイベントと体験希望者等とのマッチングがうまくいっているかをみる必要がある。また、続けてもらうには何が阻害要因となっているか整理する必要があるのではないかと。 ・今のアウトカム指標である楽農生活交流人口が、同日での施設利用、レストラン利用等がダブル・トリプルカウントになっており、正確な効果が測定できていない。 ・今のアウトカム指標は施策レベルの目標となっている。事業の最終目標がはっきりとしていない。楽農生活の実践イメージとしている「買う・食べる」「体験する」「学ぶ・育てる」「田舎暮らし・就農確保」の各段階に分けて目標を設定すべき。段階ごとに設定できないのであれば、アウトカム指標はビギナー講座の参加者数、アウトプット指標は講座の実施数等にしてはどうか。
<p>ひょうご安心・推奨ブランドの認証手続きの負担軽減 （ひょうご食品認証事業） <農林水産部></p> <p>外部委員に伺う視点 ・生産者・行政双方の負担軽減のための事務手続の手法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・業務負担を軽減するには、業務プロセスを可視化し、整理していけば圧縮できる。業務の工数を減らすことを指標の一つにしてもいいかもしれない。 ・業務プロセスを公務員しかできない仕事とそれ以外の仕事に分け、後者は外部委託やRPA等を活用する等すれば省力化は可能。 ・認証期間の延長、様式の簡素化等はまずやるべき。 ・これだけ認証数があるとレア感がなくブランド価値がでないのではないかと。このマークがあると高くても買うという状況ができていないのではないかと。ブランド価値を上げる必要がある。 ・推奨ブランドが国の基準を満たしているというものなら安心ブランドのみに絞ってもいいのではないかと。中長期的視点で見ると、今後、認証数がさらに増えてくると今回負担軽減できても、いずれ限界がくる。また、県民の多くは、2つの区別がついていないのではないかと。認知してもらえよう努力が必要である。
<p>◆目標設定・指標を伺う事業 県産農林水産物の流通・販路拡大支援事業 <農林水産部></p> <p>現行の設定指標 アウトカム：直売所・インショップの利用者数 アウトプット：県産食材新規取扱い店舗数</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・認知度の向上が事業目的なら、外食チェーン等での兵庫県フェアの開催日数をアウトカム指標にすべき。 ・アウトプット指標は県産食材新規取扱い店舗数のままでいいが、アウトカム指標のようにも思えるので引き続き検討をお願いします。 ・安心・推奨ブランドの取組も行っており、いい品質のものがたくさんあると思うので、規格外の野菜を安く売るといったことも検討してみてもどうか。飲食店では調理して出すので、形が悪い等は影響がないはずである。